

## 風まかせ

牧師 山本 護

八ヶ岳教会の聖餐式では、パンと葡萄酒(ジュース)をそれぞれ二艘ずつの「舟」に乗せて配餐しています。先の降誕祭礼拝、聖餐に与ることのできない四名の未受洗者には、頭に手を置いて祝福しました。

予測も勘定もしていませんが、配餐後、舟に四つのグラスが残されていてハッとさせられました。偶然なのか、御心を示す何かの啓示なのか。いずれにせよこの事が、心の内で聴き分けにくい低音として響き、数日間あれこれ思い巡らせていました。

シモン・ペトロは夜通し漁をしたが何も獲れなかった(ルカ 5:5)。翌朝、イエスはシモンの舟に乗って岸辺の群衆に語った後、「沖に漕ぎ出して漁をしてみないか(5:4)」と言った。そしてシモンは、渋々承諾して網を打つ(5:5)。するとどうだろう。「漁師たちがそのとおりにすると、おびただしい魚がかり、網が破れそうになった(5:6)」。シモンは岸にいた漁師仲間に助けを求め、二艘の舟で網を曳く。「二艘の舟を魚でいっぱいにしたので、舟は沈みそうになった(5:7)」。



ずっと少しの葡萄酒で事足りていた聖餐式ですが、やがて二艘の舟では間に合わなくなるかもしれません。その備えとしては、舟を改造するのか新たに造舟するか。舳(へ)と艫(とも)に少しは増席できるかもしれませんが、漁師の二艘の舟のようにイエスと共に揺られ、「沈みそうになる」ギリギリまで、このままでいたい気もします。

そういえばこんな故事があります。「舟は帆まかせ、帆は風まかせ」。「風」はそのまま聖霊のこと。元より「風まかせ」は八ヶ岳教会の歩み方ですし、しばらくこのまま行きましようか。風まかせで進み、漁師の舟のように「沈みそう」なほどに信徒が集まったなら、私たちが当初やっていたように、パンは裂き、葡萄酒はまわし飲みすればいい。

シモンや漁師仲間は、大漁で沈みそうになった舟をどうしたのでしょうか。もっと獲れるように改造したのか、あるいは増やしたか。「彼らは舟を陸に引き上げ、すべてを捨ててイエスに従った(5:11)」。あれれっ、そういうことになっちゃうのか。

新しい年を迎え、「舟」の限界定員数など心配しないで、キリストの創造の内にある私たちとして、「帆まかせ、風まかせ」でどこへでも行きましよう。讃美歌 302「み神の風をば帆にはらみて」を伸び伸びと歌いながら。Ω